

Vol.12 秘されたミース、全人的理解のために

三谷 克人 (建築家、ウィーン在住)



三谷 克人 (みたに・かつひと)

1950年大阪府生まれ。1975年京都大学建築学科卒業。1979年渡米。ウィーン工大在籍のかたわら設計事務所勤務。1992年コンペ等入選を機に独立。以降「TRANSPOLIS」を主宰、現地の建築家の職能を遂行中。日本での客員講演多数。オーストリア建築家中央連合会会員。

ベルリンでの思わぬ発見

「鉄のカーテン」が去った中欧は、車が一番だ。国境で途切れていた高速道路もつながり、朝ウィーンを発せば、夕方には無理なくベルリンに着く。チェコのブルノとプラハ、そしてドイツのドレスデンといった、この連載でも取り挙げた街を經由して、プロシアにシッセルを訪ねた。

ところがそのベルリンで、ミース・ファン・デル・ローエ (1886-1969) の予期せぬ「謎」に出くわした。筆者はミースのファンでもないから、通り一遍の知識しか持ち合わせない。それが祟ったのだと考え文献を紐解いたが、謎と捉える記述はなく、言及することも無い。

その第一は、「フリードリッヒ通りのオフィス・コンペ案」(1921)のパーズ。ニューヨークMoMAの、セピアっぽい図版で知られる「ガラスの摩天楼」だが、そのオリジナルはパウハウス資料館にある。その両者の違いが、衝撃的だった。前者の塗りつぶしの部分には、意味深い情景が描写されていた!

第二は、「新ナショナル・ギャラリー」(1968)の、大屋根を支える柱だ。逆光で構えたカメラのモニターで、ガラスの方立てと柱とがニアミスしている。撮影の歪みだろうか? じつは柱に、テーパーが付いていた。

ミースと「ガラスの摩天楼」

まずは、「ガラスの摩天楼」に関する謎を、検討しよう。

オリジナルは、拡大写真に手描きのパーズを貼り、ガラスと晩秋の暗い季節感とを、クレパスで表現したものだ。ミースがコラージュに選んだ写真は、場末の街並みだった。道路には、消火栓や資材箱の向こうに荷馬車が写り、黒い人影が彷徨している。その道路は、ビラで埋まった仮囲いの塀で通行止めとなり、その向こうに、別社会の象徴のようなガラスのプリズムが立ち上がる。

第一次大戦で疲弊したドイツ。戦後の社会

の革新を目指した芸術家集団「ノベンパー・グループ (11月グループ)」の、建築部門の委員長は、他にもないミースだった。政治闘争の犠牲となった活動家達を偲ぶ記念碑 (1926) がミースの設計なのも、こういう文脈で理解できる。

上述のMoMAのグラフィックが、ミースの建築的ビジョンを世に広めたことは認めよう。しかし、設計者の設定した社会的コンテクストは、余計なものとして削除された。美術館はミースからの寄贈と記すが、改竄された経緯について憶測は尽きない。正確な解題を、次世代の研究者に期待しよう。

欧州人ミースのスカイ・クレーパー

この「摩天楼」を皮切りにミースは、鉄骨とスキンからなる建築を、時代に合った手法として究めることに着手する。そういう彼が、スカイ・クレーパーのメッカたるニューヨークに、自分のバージョンを実現するチャンスを得たのは、1954年のことだった。

施主は欧州通のうえ、ミースの作風を好んで依頼したのだから、彼はその資質を自由に発揮できたはずだ。敷地半分を公に供することも含め、諸提案は厚意を持って迎えられ、コスト面でも便宜が計られた。そうして他に類を見ない、重厚な高層ビルが出現した。シーグラム・ビルディング (1956) である。

緑色の大大理石、トラパーチン、広場と水盤など、バルセロナ・パビリオン (1929) との符合に気付くが、ミースが主役に抜擢したのは、ブロンズだった。対候性もあって古典建築に頻繁に投入され、それ以来ブロンズは、「クラシック」のグレードを体現する素材となる。それを全身に纏わせ上に、ブロンズの特注型材を造形的要素としファサードに投入したのだから、堪らない。どう言い訳してもルール違反だから、非難の声があがった。しかしこの、様式柱の溝と同質の陰影効果は、確信犯ミースの意図だった。フランジのミリ単位の丸みは、様式柱の溝の絶妙な効果を髣髴とさせる。



②フリードリッヒ街の高層ビル・コンペ案 (1921) ミース、パーズ部分 出典：筆者アーカイブ

③新ナショナル・ギャラリー (1968) ミース、正面外観 出典：ウィキ・コモン

④シーグラム・ビルディング (1956) ミース、正面広場と下層部 出典：ウィキ・コモン

⑤新ナショナル・ギャラリー (1968) ミース、柱と方立ての重なり 出典：筆者撮影

⑥新ナショナル・ギャラリー (1968) 構造詳細、「Bauwelt」誌38巻、1968より。図版上から、軒詳細、柱詳細、屋根版反り・むくみの指示 出典：Permission by Copy Right Owner Mr. Dirk Lohan

シーグラム・ビルは、用に供することしか知らない、凡庸な高層建築に対する批判であった。70歳になったミースが、商業主義に窒息するニューヨークに意識的に放った、一矢だったのだ。

新ナショナル・ギャラリーの構造

さて、もうひとつの謎「新ナショナル・ギャラリー」だが、これは事実関係だからすぐに解明できる。柱は全長8,600mm、テーパーが付き、上端がベースより96mm小さい。そればかりか、ミースは厚さ1,800mmのスチール製屋根版に、詳細な条件を付けていた。ドイツの専門誌「Bauwelt」(バウヴェルト第38巻、1968.9.16付)に詳しいので、ご紹介しておこう。実務に携わる方々にも興味深いだろうし、ミースのいう「レス」が、設計・施工の上でどれほどの「モア」を要求するのか、認識しておく必要があるからだ。

ひとつ目は、屋根の中央部に100mmのむくみを与え、ファサードの位置まで放物線的に均すこと。2つ目は、外から3番目の梁の下端は水平とすること(ファサード位置)。3つ目は、屋根見掛けの梁の中央部10スパンは水平とし(柱間)、張出し部には四隅に向かって、それぞれ50mmの反りを付けること。

責任技術者は語る。a.建築家の寸法と形状に関する指示は、絶対的に遵守すること。b.自重と予期加重によるたわみは、計算上289mmとなること。c.むくみ100mmの実現には、上部フランジで7mm下部フランジで22mmに至る軸ズレの考慮が必要となること。

そして、施工と組み立ての苦労話となり、計算値より軽い内装のために、中央部が約



③新ナショナル・ギャラリー (1968) ミース、正面外観 出典：ウィキ・コモン

④シーグラム・ビルディング (1956) ミース、正面広場と下層部 出典：ウィキ・コモン

⑤新ナショナル・ギャラリー (1968) ミース、柱と方立ての重なり 出典：筆者撮影

⑥新ナショナル・ギャラリー (1968) 構造詳細、「Bauwelt」誌38巻、1968より。図版上から、軒詳細、柱詳細、屋根版反り・むくみの指示 出典：Permission by Copy Right Owner Mr. Dirk Lohan

20mmほど高くなったほかは、ミースの指示どおり竣工したと、誇らしげに報告している。

ミースとその孤高の功罪

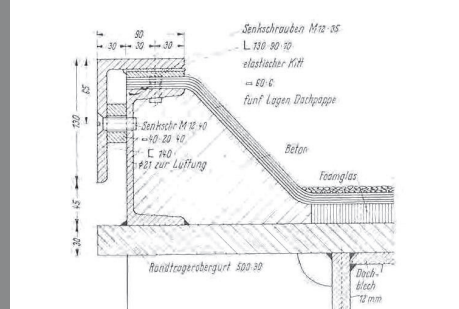
これには、驚かれたことだろう。この建築が、真に神殿たる所以である。しかし本当は、事実がそれとして伝えられないことを、訝るべきではないか。近代の巨匠には不相応として伏せたのだろうか。ヨーロッパ人のミースが故郷で、その文化が根ざす古典の作法を登用したことを、老練の保守性と矮小化すべきではない。また欧州、米国と分けて語るのも、こと建築に関しては有益ではない。ミニマルとかゴージャスとかいう資質が、ヨーロッパのアートに由来するからだ。ミースは、削ぎ落としたものに「クラシック」な価値を加え、普遍を志向したのではないだろうか。

ベルリンでのミース展カタログに、彼のモットーが紹介されている。『希望は論外で着手し、成果は無視して継続する。』意識だが、独自の道を確認し、怯まずに進むのだという、ミースの孤高な覚悟が窺われる。その熟考を前提とする削減のプロセスが、凡庸な者の誤解を誘発するという悲喜劇。神を認識できない者は、細部に秘められた真実にも気付かない。それに起因する弊害をすべてミースに背負わせるのは、我々の怠慢ではないだろうか?

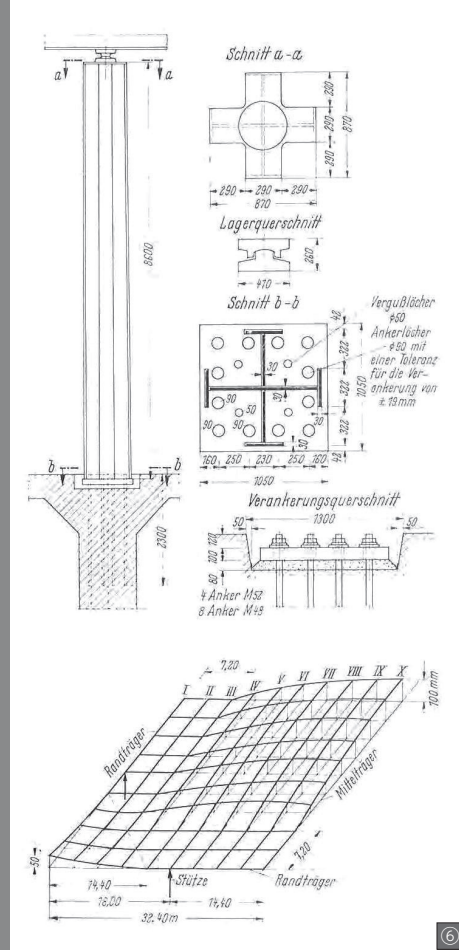
語り尽くされた感のあるミースだが、秘された事実を考慮に入れば、まだまだテーマは尽きない。コルビジェだって、きっとそうだろう。要は、秘されたものに気付くことだ。(つづく)



⑤新ナショナル・ギャラリー (1968) ミース、柱と方立ての重なり 出典：筆者撮影



⑥新ナショナル・ギャラリー (1968) 構造詳細、「Bauwelt」誌38巻、1968より。図版上から、軒詳細、柱詳細、屋根版反り・むくみの指示 出典：Permission by Copy Right Owner Mr. Dirk Lohan



⑥新ナショナル・ギャラリー (1968) 構造詳細、「Bauwelt」誌38巻、1968より。図版上から、軒詳細、柱詳細、屋根版反り・むくみの指示 出典：Permission by Copy Right Owner Mr. Dirk Lohan